

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K19	氏 名	大元 理絵
研究主題 —副主題—	課題解決学習で主体的な読みを可能にする、高等学校古典指導 —「竹取物語」をめぐる対話を通して—		
所属校	都立野津田高等学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	グローバル化が叫ばれる今日、自身のアイデンティティを形成する自国の文化を、より深く理解するための古典探究は重要となる。また、時間と空間を異にする「まだ見ぬ世の人」との対話の経験こそ、グローバル化の中で、価値観も生活スタイルも異にする人々とのコミュニケーション能力を涵養する契機にもなると考える。 古典を読むためには、古典についての基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けることが望まれ、語句の意味、用法及び文の構造の理解は欠かすことができない。しかし、このような知識注入型の一方的な指導形態が生徒に「苦痛である」と言わせ、結果、古典嫌いを生み出しているのも事実である。にもかかわらず、従来の授業形態を繰り返すばかりで古典の授業改善がなされていないことは、大きな教育課題と言わざるを得ない。 そこで本研究では、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成し、我が国の言語文化の継承と創造の担い手を育てるために、主体的な読みを可能にする学習過程の手法を用いた、古典学習の新しい指導法を探ることとした。
II 研究の方法	(1) 調査研究 「高等学校の古典の学習に関するアンケート」 (2) 基礎研究 先行研究の分析・文献による理論研究、全国の国・公・私立高等学校の授業参観、研究大会等への参加 (3) 実践研究 文章を理解・評価しながら読むことで、主体的な読みを可能にする実践」、年間の指導と評価の計画、学習指導案の開発 (4) 調査研究 「古典の学習に関するアンケート（検証授業実施学級対象）」
III 研究の結果	(1) 高校生の古典学習に対する意識と古典教育の課題 都内公立高校640名の生徒を対象に、古典に対する意識調査（24項目）をしたところ、「古文が好きだ」と回答をした生徒は23. 6%であった。また、内容把握や価値の考察等の学習に関する項目について、「興味・関心がある」、「社会生活に必要」、「文化の継承に必要」と意識している生徒は、全て10%程度で著しく低い結果となった。理由の多くは、「先生が一方的に話をしているつまらない。」、「受験対策のために仕方なく文法の勉強をしている。」とあり、受験を意識して現代語訳や文法を重視する学習だけでは、古典そのものに対する関心が高まらず、結果的に、古典の学習でも育成されるべき言語能力の伸長や、親しむ態度の育成は期待できないことが明らかとなった。 どのような授業を望んでいるかという質問には、「内容や人物の思想について、深く考えたり想像したりする授業」、「人生において必要なことや、様々なものに対する考え方を広げてくれる授業」、「日常でも使える、興味をそそる授業」「生徒がもっと参加できる授業」という記述が目立った。また、「本文を一文ずつ訳すのではなく、物語を全体で捉えたい」から、原文を読む抵抗感をできるだけなくし、文章全体を意識しながら読む力を育て、書き手の意図や内容を捉えていく学習が必要であると考えた。

(2) 進むべき古典指導の方向性

人物の心情や情景描写に触れて感受性を豊かにしたい、実生活との関連をもって学びたい、古典学習でも社会生活に必要な力を身に付けたい、といった生徒たちの望むものは、学習指導要領はもちろんのこと、現在注目を集めている PISA 型読解リテラシーの資質とも相通じるものである。そこで、「PISA 調査(読解力)の結果を踏まえた指導の改善(2)改善の具体的な方向」のプロセスを踏まえ、「問う」、「類推する」、「表現する」、「比較する」、「省察する」の五つの過程を核とした、古典の新たな学習活動開発に挑戦した。以下、「主体的な読みを可能にする五つの学習過程」として説明する。

(3) 文章を理解・評価しながら読むことで、主体的な読みを可能にする実践

古典を読解するためには基礎的知識の習得は必要だが、既得の知識や経験を活用し、テキストの情報から類推することで、内容をおおまかにつかむことも可能である。そこで検証授業では、自己の体験を基に想像力を働かせ、他者との対話を通して古典を読み、関心を深め、自己の考えを表出していく学習活動を目指し、ものの見方、感じ方、考え方を広げ深め、書き手の表現意図を捉えて共感したり、疑問をもったり、思索を深めたりする対話を通して言語活動を積極的に取り入れた。

単元は、生徒にとって親しみやすい『竹取物語』の「かぐや姫のおひたち」と「天の羽衣」を教材として選定し、辞書を使わず、原文のみで読み深めていくこととした。

テキスト全体を意識しながら読み進め、対話を通して主体的に追究していく協働学習へと導くため、「主体的な読みを可能にする五つ(課題設定、類推、表現、比較・検討、帰納的課題解決)の学習過程」を、個から全体、グループから個へと、2次の学習で8パターン繰り返した。

テキストを介して生徒と教師、生徒と生徒、そして生徒とテキストが向き合って豊富な考えを引き出し、深い対話を繰り返し広げて多様な結論へとつなげていく鍵は、適切な課題設定にある。学びたいという主体的欲求を高め、思わず考えたくなるような問い、読み深めたくなる、思考の入り口となるような問い、心を揺さぶり、自己との対話ができるような八つの本質的な問いを立てた。最後に全体を俯瞰して、全課題に対する根拠と結論を踏まえながら考察していく課題を出し、古典の普遍的価値や意味を考えさせて、授業を終えた。なお、紙面の都合上、詳しい学習内容と課題は省略する。

(4) 検証授業後の考察

I C T機器の効果的な使用、絵本や写本を使用した導入、協働による課題解決学習等、様々な工夫を凝らして学習内容を充実させた。生徒たちにとって、K J法、iPad、プレゼンテーションは、これまで経験のない学習活動であったが、生徒同士の対話の中で考えを広げたり深めたりする様子が見られた。初めて見る原文であるにもかかわらず、話合いが進むにつれて、テキストをじっくり読んで根拠を探す姿が多くなった。適切な教材選定と、課題設定の工夫をすることで、生徒たちは最後まで意欲的に学習に取り組むことができた。

ワークシートを分析すると、様々な資料を活用して評価し、課題に対する深い考察が行われていることから、建設的な合意形成を目指した言語活動の展開が、言語文化への興味や関心を広げることに有効であることが分かった。同一課題の根拠の確かさを比較・評価させる活動では、論理的思考を働かせ、さらに、課題について意見を構築することができている。類推・表現する段階では、生徒自身による評価と、教師による評価の融合性に視点を置き、より主体的な活動へと発展させ、自由な発想を引き出すことができた。

	課題解決に向けて自己の考えや意見をもち、テキストを的確に読み取り、より確かな根拠を求めながら思考する。そして、結論を示した上で、その判断の基礎となる考え方を、根拠を示して説明する。さらに、他者の意見を聞いて評価し、自己の考えを再構築して深める。これらの学習過程が、主体的に読もうとする態度の育成につながり、受動的な授業実態を打破するものとなった。
IV 考察	(1) 総合考察 検証授業を実施したクラスに、再び同じ項目で意識調査した結果、7割の生徒が古典学習に「興味・関心」があると答えている。また、「社会生活」や「文化の継承」に必要だと意識している生徒も、1割から5割へと上昇した。検証授業終了後、生徒たちは「すごく楽しかった」、「かぐや姫の話は素敵だね」「もっと考えたいよ」と、感想を言い合っていた。これらのことから、『竹取物語』をめぐる対話で、古典に親しんだ様子を見取ることができる。 古典に触れる中で、自身の知識や価値観に照らして感じたり考えたりする指導の在り方は、古典との対話を促し、生徒同士の交流を深め、古典の学習を生徒にとって価値あるものにしていくことができる。それは古典を学ぶ意義を認識させ、古典に親しむ態度を育成することにつながっていくことを、本研究で証明することができたのである。 (2) 成果の活用法 古典の普遍的価値や、その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味について考えさせることは、古典の学習において重要となる。筆者が開発した、「主体的な読みを可能にする五つの学習過程」を用いた新しい古典学習展開モデルは、必要に応じて現代語訳を用いたり、課題設定の内容や提示する数を工夫したりすることで、校種を超えて活用することもできる。また、適切な教材選択をすることで、対象生徒の実態に合わせた学習活動を行うことができる。さらに、映像などの視覚教材を使用教具として取り入れるなどの、発展性も十分に考えられる学習モデルとなっている。 古典を読む楽しさを実感し、主体的に読もうとする態度を身に付けさせることで、「古典を読む能力」の更なる向上を図るべく、これからも古典の授業方法の探究を続けたい。